



TITLE:

プラトンのエロース論(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

久保, 徹

CITATION:

久保, 徹. プラトンのエロース論. 京都大学, 1997, 博士(文学)

ISSUE DATE:

1997-03-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/202137>

RIGHT:

氏 名	く ば とおる 久 保 徹
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 84 号
学位授与の日付	平 成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 哲 学 専 攻
学位論文題目	プラトンのエロース論

論文調査委員 (主 査) 教 授 内 山 勝 利 教 授 山 本 耕 平 助教授 中 畑 正 志

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、プラトン哲学における初期から中期にかけての展開の根本的なモチーフを「エロース（欲求・欲望）」論としてとらえ、同時にソクラテス＝プラトンのな哲学知を、その最も豊かな発動のあり方と見ることによって、その思想の基本的特質を明らかにすることを試みたものである。論文全体は、「哲学的」エロースのダイナミズムの基盤をなすソクラテス的な「徳」と「知」をめぐる問題の基本的な諸相を論じた第1章と、われわれの生の活動そのものとも言うべきさまざまな欲求・欲望の根底に善への欲求を見てとるプラトン初期対話篇の考え方の検討を経て、中期対話篇に展開されるエロース論、魂論（魂三部分説）を、有機的連関のもとに各論的に論じた第2章以下の諸論考とから成っている。

とりわけ大きなスペースを占めている第1章では、徳をめぐるソクラテスの探究のあり方と、そこにおける知に対する独特の立場取りの意味するものを明らかにすることが、最近の研究動向およびプラトンの原典の精緻な検討を踏まえて試みられる。それは、とりまなおさず、エロース論の骨格を明らかにするとともに、それを主眼的に論ずる論者の基本的見地を提示するものでもある。ソクラテス＝プラトンの「学」とは、よき生の実現への努力にほかならないがゆえに、エロースは哲学的営為において最も高度な仕方で発動され、また当の哲学的営為はエロース的な善への欲求の構造をなす、というのが論者の立脚点である。本章での中心的な論点をなしているのは、最近論じられることの多い二つの問題、すなわち P. T. Geach の提案した「定義知」と「事例知」に関するプラトン批判と、G. Vlastos などによって提起されたソクラテスの「知の否認」とエレンコス（吟味論駁）的方法の認識論的ステイタスをめぐる議論とを再検討することである。論者は、われわれの知的営為における暫定的な定義や判断による「思わく」の領域における考察の可能性に着眼し、それによって二つの問題を、いわば擬似問題にすぎないものと判定する。しかし他方でエレンコスの方法を独自の視点から（ある意味では Vlastos 以上に）積極的に評価する。すなわち、それはついに思わくの中での探究を出るものではなかったにせよ、論理的連関を整合的にたどりながら、自他の思わくを吟味検証（エレンコス）しつつ、全体的な認識を深めていくことによって、よ

り確かな思わくへと質を高めていくことが可能なものと考えるのである。その点で、エレンコスの方法は、中期対篇以降においてアイデア論を背景として提出されるヒュポテシス（仮設）の方法に連続するものであり、基本的に同一の性格が認められる。論者によれば、以上のようにして得られるべきより確かな思わくに即してものごとを洞察し、行為し、生きることが、ソクラテスにとっての愛知の生であり、それによって実現される愛知の徳・「人間並みの」幸福が、ソクラテスの生をすぐれたものたらしめている。しかも、ソクラテスの探究とその成果は、たえずその先に真なる知と真なる徳と幸福を設定し、それを希求しつづけるがゆえにこそ、有意味たりうるのである。ソクラテス的な生のあり方が「エロース」によって特色づけられ、「エロース」が究極においては徳と幸福を実現するための知的努力として発現する、とされるのもそのためである。

われわれの欲求・欲望はつねに「よいと思われる」ものを志向している、とする初期プラトンの「善欲求説」の実質的意味内容と中期エロース論への一貫した連続性を検討した第2章と、中期プラトンのエロース論が最も典型的に語られた『饗宴』のディオティマ説話を分析しつつ、欲求・欲望が総体として「価値志向性」を有していることを確認・強調した第3章は、本論文の最も重要なテシスを提示するものである。

第2章では、まず『メノン』77Bff.における「善欲求説」を検討したのちに、エロース的活動についてのより発展した記述を『国家』における「魂三区分別説」に見いだして、そこに述べられた魂の「理知的部分」と、それよりも下位の「気慨的部分」および「欲望的部分」のそれぞれがもつ欲求を、「(自覚的な) 本当によいものへの欲求」と「よいと思われるものへの欲求」として対置されるべきこと、すなわち下位部分の欲求といえどもけっして無方向的なものではなく、明らかな「価値志向性」を有していることを、当該箇所テキストに即して緻密に検討する。ここで得られた立場からすれば、アクラシア（無抑制的行為）と呼ばれる事態の認否をめぐって初期の善欲求説と中期のエロース論の内実とに鋭い対立ないし変更を指摘する T. Penner の主張も、また中期エロース論そのものにおいても「エロースの階梯」の考え方（『饗宴』）と「水流の比喻」の考え方（『国家』）との間に分裂があるとする C. Kahn の解釈も、ともに誤りとして退けられる。論者によれば、それらの個所に語られている中期エロース論は、明らかに初期欲求説のモチーフを継承発展させたものであり、魂のいかなる部分の欲求にも「価値志向性」を認める立場を堅持するものとなっている。そして、まさにそれゆえにこそ、下位部分の諸欲求をも正しい方向に導き転化させることが可能とされるのであって、あらゆる欲求が「よいと思われるもの」を求めるものである以上、「本当によいものへの欲求」（＝理知的部分の欲求）に従い、あるいはそれへと合流転化することが、それらの欲求にとって抑圧や無視としてではなく、その本性の実現としておこなわれうるのである。

第3章では、『饗宴』のディオティマの教説において、「美の大海・美のアイデア」へと上昇していくエロースは、けっして低次のエロースを次々と切り捨てることによって純化された知的エロースではなく、あらゆるエロースがその行程の原動力となりつつ、総体としてそこに導かれていくことが論じられる。したがって、いわゆる「大秘儀」の過程においても、それをたどるのは知的エロースのみだと解する F. M. Cornford らの一般的解釈は退けられなければならない。すなわち、「美の階梯」にさしかかるエロースは、美しい肉体への愛着と愛知への憧憬をとともに内にはらんだ豊かな内容のものである。さらに、論者によれ

ば、その上昇のプロセスを可能にするのはけっして「理知」のみの認識的なはたらきではなく、むしろあらゆる位相におけるエロースの「価値志向性」そのものがその原動力であり、あらゆるエロースのダイナミズムが、それを自己実現するはたらきとして、美の知的認識と認識を通じた上昇を促していくのである。

第4章でなされる「魂三区分説」(『国家』)の再検討は、プラトン哲学の重要なテーマの一つを正面から扱うものであるとともに、先の二つの章における立論を、異なった視点から相補的に裏付けようとするものである。この問題については、きわめて多様な解釈が提起されているが、論者はそのエロース論に立って、特に魂の各部分の欲求的な作用のあり方について独自の立場を確定している。従来の有力な解釈図式は、基本的に、魂の三区分を純然たる機能の違いと見る(機能区分説)か、それぞれに独自の欲求的機能を認める(欲望区分説)か、三区分のすべてに三つの機能を認めつつそれらの程度の差異を考える(適性区分説)かのいずれかに整理されうるが、論者は、そのいずれも全面的に一貫した説明を与えることができないとして退け、魂の三部分とは欲望(エロース)のそれぞれに異なった発現様態のことであり、それぞれに特有の目的志向をもち、固有の機能をはたらかせて行為決定をおこなおうとするものである、と想定する。また同時に各部分間の相互作用をも認めることによって、それら同士の対立(心的葛藤)と、いずれは理知的部分の洞察がそのつどの最も有効な行為決定を促すことによって、心的葛藤を克服しつつ三部分の調和ある共生へと導いていく過程が説明される。「魂三区分説」もまた、われわれの心的欲求の総体としてのエロースが、知的エロースへと高められていく可能性と相応しているのである。

第5章では、以上のようなエロース論の理解にもとづいて、それがわれわれの倫理的生にとってどのようなはたらくかが、『国家』において論じられる正義という徳目の擁護の議論の成否の検討を通じて具体的に考察され、プラトンのエロース論が倫理的な局面において有している意義の解明が試みられる。議論は、D. Sachsによって提起された問題、すなわちプラトンの正義擁護論は行為としての正義を各人の「魂の内なる正義」にすりかえてなされたものにすぎないとする批判に応答することによって、逆に「魂の内なる正義」の重要性を確認し、まさにそれを獲得するためのものとして、行為における正義の実践も擁護されている、という仕方で行なわれる。プラトンの正義論は、「魂の内なる正義」という独自の概念規定を根本において、伝統的な道徳規範を意味づけ擁護しようとする試みであり、その概念規定においてエロース論は重要な要因となっている、とするのが論者の主張である。

論文審査の結果の要旨

ギリシア的概念としての「エロース」は、われわれの心的な欲求・欲望のすべてを意味しているが、ソクラテス＝プラトンの哲学思想においては、その日常的語感を踏まえつつ、人間的生の可能性を開く衝動力として、とりわけ知的認識や倫理的行為をうながす根本の力として、きわめて重要な意義を担うものとなっている。本論文は、初期および中期のプラトン哲学におけるエロース概念の根幹を、特に哲学という独自の知のあり方との関連のもとに明らかにしようとしたもので、第1章において「哲学的エロース」の基盤をなすソクラテス的な「徳」と「知」のあり方を論じたのちに、第2章以下において、われわれの生の根底にあるさまざまな欲求・欲望のすべてに善への志向を見てとるプラトン初期対話篇の考え方の検討を経て、中期対話篇に展開されるエロース論、魂論の基本的構造とその意味するものの解明を試みてい

る。

第1章では、対話とエレンコス（吟味論駁）によるソクラテスの哲学的活動が、いかなる意味で本質的にエロースなるものによって性格づけられ、それが根本要因をなしているかが明らかにされる。しかし、同時に本章はソクラテス的な「徳」と「知」のあり方を、最近の研究動向およびプラトンの原典についての精緻な目配りを通じて考察した論考としても、固有の意義がみとめられるものとなっている。議論の焦点に置かれているのは、最近論じられることの多い二つの問題、すなわち P. T. Geach の提起した「定義知」と「事例知」に関するプラトン批判と、G. Vlastos らによって提出されたソクラテス的な「知の否認」とエレンコス（吟味論駁）の方法の認識論的ステイタスをめぐる問題とを再検討することである。論者は、立論の基礎をたえずプラトン原典中の言明に引き戻すことによって、これらの批判が言わば「擬似問題」にはかならないこと、かえってそこにソクラテス＝プラトンにおける知の独自のあり方が見てとられることを明らかにしている。最近の多数の議論を的確に整理したうえで、それらによって見過ごされてきたプラトンの前提を掘り起こし、網羅的なテキスト個所の指示によってそれを裏付けた点は、この問題に対して論者のなした新たな貢献であり、その成果は、なお一部のテキスト解釈に議論の余地を残すとはいえ、すぐれて説得的なものとなっている。

本論文の中心部分をなす第2章から第4章では、日常的な意味でのエロースと哲学的・知的エロースとの連続一体性、前者から後者への上昇のダイナミズムが、プラトンの初期対話篇における「善欲求説」、中期の『饗宴』におけるディオティマのエロース論、『国家』における「魂三部分説」などを主題として論じられている。論者の立場は、一貫して、日常次元におけるわれわれの欲求・欲望のすべてに有意義性を認め、その総体としての「上昇」の可能性を主張するところにある。そこからもたらされる独自の論点として、特に次の二つを挙げておきたい。

(1) 『饗宴』のディオティマの教説において語られているのは、けっして低次のエロースを次々と切り捨てることによって純化された知的エロースの道行きではなく、あらゆるエロースがその行程の原動力となり総体として導かれて行くこと、すなわちあらゆるエロースのダイナミズムが、それを自己実現するはたらきとして、美の知的認識と認識を通じた上昇を促していくこと。

(2) 『国家』における「魂三部分説」についての従来の解釈は、いずれも全面的な一貫性と整合性を保持しえないものであり、特に「理知的部分」による一方的な欲望の抑圧や支配を目指したものと解されてはならないこと。論者は、魂の三部分を欲望（エロース）のそれぞれに異なった発現様態ととらえた上で、各部分間の相互関係を考え直すことによって、それらの調和ある共生へと導かれていくべきものであることを主張する。

さらに、続く第5章に展開されているプラトン『国家』の正義論は、本論文の構成においてはやや補論的な位置にありながら、その内実は以上のようなエロース理解と深く呼応した仕方で「魂の内なる正義」という概念を基底に置いて、プラトンの本来の思想と目されるところを正当に取り出したものであり、D. Sachs らによる批判的論旨に対して、一つの明確な回答を提示している。

以上に見てきたように本論文の議論展開には、その細部にも論者独自の解釈と理解が多数示されており、また全体としてきわめて特色ある「プラトンのエロース論」を構成することに成功している点は高く評価

することができよう。しかし、ときには論者の立場の一貫性をやや性急に主張するあまりに、たとえば「魂三部分説」の解釈などについて一面的な断定に陥っているところもなしとしないし、また繰り返し論じられるエロースの「上昇」における欲望一般と愛知的エロースの等価性と相互関係性についてもより明確な論述が望まれるところである。さらには、「プラトンのエロース論」としては、なお残された課題も多い。ただし、これらの点は、論者の今後の研究において発展的に補強されていくべきものであり、本論文に固有の価値を大きく損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成9年3月6日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事からについて口頭試問を行った結果、合格と認めた。